

児童の動機づけ特性に関する自己認知

— 社会志向性・課題志向性を中心に —

中山 勘次郎

要 旨

本研究では、児童の社会志向性・課題志向性と、親和動機、達成不安、locus of control、および価値観との関連の分析をもとに、児童の動機づけ傾向に関する自己認知の様相をより広範に検討することが目的とされた。

このため、小学6年生243名に対して、社会志向性・課題志向性測定尺度が実施され、その結果から、両志向性の相対的強弱にもとづいて4つの群が構成された。またこれと並行して、親和動機、達成不安、locus of controlの測定尺度および価値観に関する質問紙が実施され、4つの志向性群における認知の特徴や尺度間の相関関係についての分析が行われた。

主な結果は、次の通りである。

- (1) 社会志向性は、消極的親和動機とほとんど相関が見られず、積極的親和動機とは比較的高い相関が得られたことから、社会志向性がより積極的な動機であることが確かめられた。
- (2) 社会志向性の優位なHL群では、達成不安が強く、locus of controlはHH群と比較して外的な統制傾向を示した。この結果は、HL群における評価懸念の存在を支持する傾向にあった。
- (3) 価値観については、男女によって傾向が大きく異なり、一般的傾向を見いだすことはできなかったが、HL群での評価懸念やLL群での消極性を一部示唆する結果が得られた。

KEY WORDS

social and task-orientation 社会志向性・課題志向性

affiliation motive 親和動機 achievement anxiety 達成不安

locus of control 統制位置 sense of value 価値観

問題と目的

達成動機研究の端緒となった Murray(1938)の著者において、達成欲求が親和欲求や勢力欲求などととも社会的動機のひとつとして位置づけられていることに端的に示されるように、達成動機は多分に社会的な要素を含んだ動機である(中山, 1986)。この点で達成動機理論は、学習意欲に関するもうひとつの重要な理論である内発的動機づけ理論と区別される。内発的動機とは、最適な水準の不適合を含む事態を追求し、挑戦しようとするというように、きわめて認知的な動機である。これに対して達成動機は、困難を克服してある目標に到達するといった、内発的動機と共通の特徴を持ってはいるが、その目標には、外的な報酬を伴う社会的な目標、たとえば「成績一番を通したい」のような目標も含まれる(石田, 1981)。個人の興味は、必ず

しも課題そのものに向けられる必要はないのである。この点で達成動機は、いわば「社会的なものに向けられた」動機という特徴を備えていると言えよう。

しかし、従来の達成動機研究では、こうした達成動機の社会的な側面に対する言及は比較的少なかったように思われる。達成動機のとらえ方がより広範なものになり、達成動機を他の社会的動機と関係づけて把握する傾向が強まって来たのは最近のことである（奥野，1983）。

このような流れの中で、中山（1983）は、Nakamura & Finck（1980）の研究にもとづいて、児童の動機特性を社会志向性（social orientation）と課題志向性（task-orientation）という2つの方向性を持ったものとしてとらえることを試みている。社会志向性とは、対人関係や他者からの評価に興味を示し、社会的に顕現的（visible）な行動に参加しようとする動機である。一方課題志向性とは、課題解決に伴う効力感への欲求や解決過程それ自体に対する興味として定義される。ここでの“課題”という用語は、特定の作業課題ではなく、日常の学習活動全般を指すものである。

特に重要な点は、これらの志向性が、従来の達成動機と親和動機のようにそれぞれ独立の場面で独立の影響を持っているというのではなく、相互に関連しあって児童の達成行動に影響を与えていると仮定している点である。例えば、同じように学習意欲の高い児童でも、ある児童はその学習課題そのものに興味を持ち、あるいは難しい課題であることに挑戦的意義を見いだして高い学習意欲を示す場合があるろうし、別の児童では、先生やクラスの友人たちに自分を認めてもらいたいために高い学習意欲を示すかも知れない。後者の承認欲求は、決して消極的なものではなく、その児童の達成行動を高いレベルで維持する重要な要因となっているであろう。このように、同様な達成行動でも、社会志向性と課題志向性の両者が、各児童によって独特な様式で関わっているのである。

こうしたことから中山は、小学校中・高学年児童を対象として、各児童における両志向性の相対的強弱を測定し（1983，1986）、そのパターンによって独自の行動傾向が見られるのではないかとの仮定にもとづいて一連の観察的・質問紙的研究を進めている。その結果、児童のクラス内での社会的地位、学業成績、共同作業での行動などについていくつかの特徴が見いだされている（1983，1984）。

このように、児童の行動や、その結果としての社会的地位や学業成績についてはある程度検討が進められているが、一方児童の認知面に関しては、中山（1983）が self-esteem 尺度と発達力動性検査とから児童の社会的適応感を検討している以外は、検討は進められていない。そこで本研究では、社会志向性・課題志向性の相対的強弱による児童の認知傾向の違いをさらに広範に検討することが目的とされた。本研究で取り上げられるのは、児童の動機づけと比較的直接的に関係すると考えられる諸概念、すなわち親和動機、達成不安、locus of control、および価値観である。

志向性と親和動機

親和動機は、他者と友好的関係を維持しようとする動機である。従来この動機は、場合によっては他者との競争を伴う達成行動とは両立しない動機であると考えられ、親和動機は達成動機とは無関係かまたは妨害的に働くと考えられてきた（Sid & Lindgren，1982）。本研究における社会志向性の概念は、こうした消極的な動機ではなく、より積極的に達成行動と関連する動機特性として設定されたものである（中山，1983）。とすれば、社会志向性と親和動機との区別をま

ず明確にする必要がある。

ところで、親和動機研究の枠組みの中からも、親和動機を、仲間からの拒否への不安などの消極的 (negative) なものと、友好関係をさらに拡大しようとする積極的 (positive) なものとに区別すべきであるという主張が見られる (例えば Boyatzis, 1973)。下山・曾我部 (1977) は、彼らの作成した児童用達成・親和動機づけ尺度において、親和動機に関して4因子を抽出したが、そのうち2つが Boyatzis の述べる積極的親和動機づけと消極的親和動機づけとに対応すると指摘している。こうしたことから本研究では、各児童の親和動機の強さを積極的・消極的の2つの側面に分け、それぞれの親和動機と社会志向性との関係が検討された。

志向性と達成不安

Nakamura & Finck (1980) は、様々な場面における児童の有効性という観点から、日常の観察にもとづいて5つのタイプの児童を区別している。それらは、社会志向的 (socially oriented)¹⁾、課題志向的 (task-oriented)、社会志向・非有効的 (socially oriented less effective)、疑似課題志向的 (pseudo task-oriented)、非有効的 (least effective) の5つである。それらは、彼らの尺度ではそれぞれ HHH 群、LHH 群、HLL 群、LHL 群、LLL 群 (H・L は、順に社会志向性・課題志向性・自己確信の高低を示している) に対応している。ここで注目されるのは、社会志向群と社会志向・非有効群との区別である。Nakamura & Finck は、両群の違いを彼らのパフォーマンスに対する懸念の差に由来するとしている。すなわち、非有効群の方は結果への期待が低く、失敗への不安や評価への懸念といった反応が見られる。彼らは、純粋に社会的場面に興味を持っているのではなく、評価への懸念、社会的望ましさ、または他者の注意の喚起などのために、積極的な社会的行動を取っている可能性があると言うのである。

中山 (1983) は、社会志向性・課題志向性の相対的強弱によって児童を4つのタイプに分類しているが、この分類は、Nakamura & Finck の課題志向群と疑似課題志向群とを区別できない点を除けば、Nakamura らの5つのタイプにおおむね重なるものと考えられる。Nakamura らの尺度は自己確信という第3の次元が重要な意味を持っており、また社会志向性を示す項目内容の定義も異なるため、中山の尺度との比較は慎重でなければならないが、Nakamura らの社会志向・非有効群が、中山の尺度における社会志向性の優位な群 (HL 群; H・L は、順に社会志向性・課題志向性の高低を示す) と類似しているとすれば、達成不安傾向は、HL 群において顕著に見られることが予測されるであろう。

志向性と locus of control

前節に述べたように、HL 群では「他者からの評価」が重要な意味を持っていると考えられる。このことは、彼らの locus of control が外的要因、特に彼らにとって意味のある他者 (significant others) に向けられていることを示唆するであろう。

locus of control 概念に意味ある他者の次元を加えたのは、Levenson (1974) である (彼の用語では powerful others)。彼は、同じ外的帰属でも、運に帰属する場合は個人に統制の可能性はないが、意味ある他者に帰属する場合は、統制の可能性があるため、活動への関与は低められないとし、外的統制の2つのタイプを区別すべきであると主張している。この主張に従えば、HL 群は、外的統制傾向が強いが、それは必ずしも消極的なものではないと推測されるであろう。一方、同様に社会志向性の高い HH 群では、一般に内的な統制傾向を示すのではないだ

ろうか。

ところで、Levenson の作成した質問紙は成人向けであり、また質問項目に powerful others という言葉をそのまま用いている。したがって、本研究で対象とする小学校高学年児童には適用が難しい。このため本研究では、意味ある他者次元の重要性を認めつつも、内的・外的統制型に分ける本来の locus of control 概念にもとづく検討にとどまらざるを得なかった。また、一般に locus of control 研究では、場面を特定せず、生活全体に関する統制感が問題にされる場合が多いが、こうした概念規定にもとづく質問項目は、小学生にとって曖昧なものになりやすい。そこで本研究では、学業達成場面に限定した locus of control 尺度としてよく用いられる Crandall, Katkovsky, & Crandall (1965) の尺度によった。

志向性と価値観

児童がどのような方面に動機づけられるかは、児童がそれらの各方面に対してどのような価値づけを行っているかに大きく依存する。あることを知ることが、自分にとって必要かつ重要であると考えれば、その情報を知りたいと思う度合は強いであろうし、ある友人との相互作用が、自分にとって快であり有益であると考えれば、その友人とより頻繁に会いたいと考えるであろう。この点で、児童の価値観は、彼らの志向性の状態と密接に関わっていると考えられる。

千石・飯長 (1979) は、日本の小学生を類型化する試みの一つとして、児童の理想像 (どんな子どもになりたいか) を問う質問紙調査を行っている。この調査で使用されている質問項目には、自律と依存、勉強と遊び、孤立と共同など、社会志向性・課題志向性に関連する項目が多く見られる。このため本研究では、千石・飯長の質問項目にもとづいて、児童の価値観と志向性との関係について検討が行われた。

以上のように、本研究では、社会志向性・課題志向性を中心として、児童の動機づけ傾向に関する自己認知に対して、様々な角度から検討を加えることが目的とされた。

方 法

測定尺度

(1) 社会志向性・課題志向性

中山 (1986) による社会志向性・課題志向性尺度 (改訂版) を使用した。この尺度は、社会志向性に関する 9 項目、課題志向性に関する 9 項目の計 18 項目よりなっており、それぞれ 2 種類の記述のうち自分に近い方の記述を選択し、4 件法で回答がなされる。項目内容は、社会志向性については社会的・対人的状況における積極的行動、課題志向性については困難への挑戦と独力での達成傾向に関するものである。

得点化にあたっては、各項目とも、社会志向性・課題志向性の高い方から順に 4～1 点を与え、9 項目の得点を合計したものが、各児童の社会志向性・課題志向性得点とされた。可能な得点範囲は、各志向性とも 9～36 点である。

次に、児童個人内での社会志向性・課題志向性の相対的強弱にもとづいて、各児童が 4 つの群に分類された。この分類基準については、中山 (1983) で用いられた標準得点の差を基準と

する方法に対して、中山（1986）が粗得点を基準とするよう変更を試みた。しかしその後の施行によれば、両志向性の得点分布は調査対象により一様でなく、特に両志向性の平均・標準偏差の間に大きな差が見られる場合があるため、粗得点の差による分類はかえって不適切な分類となる危険性があると考えられた。このため本研究では、標準得点の差を基準として分類が行われた。ただし、各群の特徴をより明確にするため、中山（1986）を参考に、各群への分類基準に若干の幅を持たせ、得点差の微妙な者は、中間型として分類から除外された。

分類は、具体的には次の基準で行われた。はじめに、各志向性ごと男女別に平均値と標準偏差を求め、各児童の得点を標準得点に換算する。この標準得点において、両志向性間に1以上の差がある場合、その高低に応じて社会志向性の優位な群（以下 HL 群と略称する）あるいは課題志向性の優位な群（以下 LH 群と略）に分類する。また、両志向性の差が0.5以下の場合、粗得点が平均値より1点以上高い者を両志向性とも高い群（以下 HH 群と略）、平均値より1点以上低い者を両志向性とも低い群（以下 LL 群と略）に分類する。ただし、両志向性とも標準得点の絶対値が1以上の者は、無条件に HH 群・LL 群に分類する。

(2) 親和動機

下山・曾我部（1977）による児童用達成・親和動機づけ尺度の親和動機づけ項目から、実施時間の都合上18項目を選択し、文章表現を一部変更して用いた。項目選択は、下山らの報告している因子分析結果をもとに、親和動機に関する4因子のうちいずれか1因子に、4以上の負荷量を持ち、複数の因子に高い負荷を示していない項目を基準とした。回答は「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4件法で行われ、親和動機の高い方から4～1点を与えて得点化した。なお下山らによる各因子の命名によれば、4因子はそれぞれ「友好関係を維持し、あるいは拡大しようとする傾向」（因子Ⅰ）、「仲間からの別離や拒否に対する不安」（因子Ⅲ）、「仲間に対する従順や服従の傾向」（因子Ⅳ）、「仲間に対する協調や協力の傾向」（因子Ⅴ）とされ、このうち因子Ⅰは積極的親和動機づけ、因子Ⅲは消極的親和動機づけにそれぞれ対応すると述べられている。

(3) 達成不安

下山・曾我部（1977）による児童用達成・親和動機づけ尺度の達成動機づけ項目から8項目を選択して用いた。項目選択は、下山らの報告している因子分析結果から、「失敗の予測と恐怖」因子に、4以上の負荷量を示している項目を基準とした。回答は親和動機と同様4件法であり、得点化も同様の方法で行われた。

(4) locus of control

Crandall et al. (1965) による Intellectual Achievement Responsibility Scale を、下山・藤原（1968）の訳を参考にしながら翻訳した。ただし、原文には日本の小学生の経験になじまない表現が多く見られるため、適宜項目を削除し、または内容に若干の修正を加え、14項目を訳出した。このうち7項目は成功場面に関するものであり、他の7項目は失敗場面に関するものである。

各項目には内的統制・外的統制を記述した2つの選択肢があり、そのうち自分に近い方の記述を選択して回答する。得点化の際は、内的統制に関する記述を選択した場合に1点を与え、各項目の得点を合計したものがその児童の locus of control 得点となる。したがってこれは、高得点であるほどその児童の内的統制感が強いことを示している。

(5) 価値観

千石・飯長(1979)による「子どもからみた子どもの理想像」に関する質問紙(10項目)より、遊びに関する質問を除く8項目を使用した。これは、locus of control 尺度と同様、各項目ごとに2つの価値を示す記述が対にして呈示され、そのうち自分がなりたい方を選択するようになっている。なおこの尺度では、項目ごとに表現されている価値が異なるため、結果は各項目ごとに分析される。

対象児童

埼玉県内の1小学校における小学6年生6クラス243名(男子120名、女子123名)が対象とされた。これは、この小学校における当該学年の全児童である。

手続き

各質問紙は、授業時間後、担任教師のもとで、各クラスごとに集団で実施された。この時、尺度間に類似・関連した内容の質問項目があるため、それによって回答が干渉されるのを抑制するよう、質問紙は2回に分けて実施された。第1回目には、社会志向性・課題志向性尺度と価値尺度が、また第2回目には親和動機、達成不安、locus of control の各尺度が実施され、両施行の間には1週間の間隔があげられた。実施期間は1986年7月である。

なお、これらの尺度のほか、児童の知能偏差値に関する資料が用いられた。これは、1986年6月に実施された田中B式知能検査(小学校高学年用)にもとづくものである。

結 果

方法に述べたように、質問紙の実施は2回にわたっており、欠席のため質問紙への回答が部分的にしか得られない児童が見られた。このため、これらの児童については、分析の中心である社会志向性・課題志向性尺度への回答の得られなかった者、あるいは回答が不完全なため得点が算出不可能な者5名を分析全体から除外し、その他の尺度への回答が得られなかった者のデータは、当該尺度の分析についてのみ適宜除外された。

各志向性群における特徴を比較するため、はじめに、方法に述べた分類基準に従って、社会志向性・課題志向性尺度の得点から4つの群が構成された。これによって分類された各群の人数は、HH群37名(男子17名・女子20名)、HL群41名(男子18名・女子23名)、LH群44名(男子21名・女子23名)、LL群34名(男子18名・女子16名)の計156名(65.5%)であった。

以下に、各指標ごとに4つの群の特徴が分析される。なお、以下に述べる諸指標への反応において、性差の有無を検討した結果、いくつかの指標で性差が見られた。このため、以下の分析においては志向性×性別の2要因の分散分析(重みづけのない平均法による)が用いられた。また価値観の分析については男女別に χ^2 検定が適用された。

(1) 志向性と親和動機

親和動機尺度は、本研究で作成されたものであるため、まず尺度の内的整合性が検討された。第1に、質問紙の印刷の問題により、2つの項目で回答もれが多かったため、これらは分析から除外された。次に、残りの16項目について、各項目と尺度得点との相関係数²⁾や因子分析(主因子法→Varimax回転)における共通性の値からさらに4項目が除外され、残る12項目によっ

表1 親和動機尺度の項目内容と回転後因子負荷量

項 目 内 容	I	II
1. 友だちから知らん顔をされると、とてもみじめな気持ちになる。(III)	.226	.479
2. クラスやグループでできたことには、いつもしたがう。(V)	.569	.077
3. 家でも学校でも、ひとりているのはとてもさびしい。(III)	.191	.517
4. 人の仕事をてつだうことがすきだ。(V)	.456	.078
5. クラスがかわって友だちがいなくなると、さびしく思う。(III)	.116	.451
6. なかのよい友だちといっしょにいるだけで楽しい。(III)	.106	.425
7. 親友のためなら、なんでもしてあげる。(I)	.338	.378
8. どんな人からもすかれるようになりたいと思う。(III)	.467	.261
9. いつも友だちやグループのためになるよう、努力している。(V)	.644	.202
10. 人とつきあうのがうまいと思う。(I)	.449	.019
11. はじめて会った人でも、その人からすかれるよう努力する。(I)	.642	.189
12. いつも、できるだけ友だちをたくさんつくろうとしている。(V)	.695	.179
固 有 値	2.487	1.212

(カッコ内は下山・曾我部, 1977による因子分類)

て、最終的な尺度が構成された。したがって、可能な得点範囲は12~48点になる。なお、最終的な尺度における項目-得点相関係数は $r = .239 \sim .594$ ($p < .001$)であり、偶数項、奇数項に折半した Spearman-Brown 係数は .740であった。

また、この12項目について因子分析を行ったところ、表1に示すように2因子が抽出された。このうち因子IIに高い負荷量を示している項目1, 3, 5, 6の各項目は、いずれも下山・曾我部(1977)による因子分析において「仲間からの別離や拒否に対する不安」(因子III)に属する項目である。一方、因子Iに高い負荷量を示す項目のうち、項目2, 4, 9, 12は「仲間に対する強調や協力の傾向」(因子V)、項目10, 11は「友好関係を維持・拡大しようとする傾向」(因子I)に属している。ただし、因子Iに高く負荷している項目8は、下山・曾我部では拒否への不安に属しており、また下山・曾我部で友好関係の維持・拡大傾向に属していた項目7は、本研究では両方の因子に低く負荷していた。

以上のように、この因子分析結果は、因子IIが下山・曾我部の消極的親和動機にほぼ対応するほか、因子Iも、仲間との協調や友好関係の拡大といった積極的親和動機に対応しており、親和動機の2因子説をおおむね支持するものであった。そこで親和動機については、総得点のほかに、積極的・消極的それぞれの親和動機得点が算出された。得点化の際は、因子分析の結果、各因子に.3以上の負荷量を持つ項目を選択し、それらの合計を各親和動機の得点とした。すなわち、積極的親和動機得点は項目2, 4, 7, 8, 9, 10, 11, 12の8項目の合計(可能な得点範囲は8~32)、消極的親和動機得点は項目1, 3, 5, 6, 7の5項目の合計(得点範囲は5~20)である。なお Spearman-Brown 係数は、積極的親和動機得点で.802、消極的親和動機得点で.652であった。

さて、4群の親和動機得点は表2に示されている。志向性×性別の分散分析によれば、志向性の主効果および性差が有意であった(志向性： $F_{(3,148)} = 9.78$, $p < .001$; 性別： $F_{(1,148)} = 55.67$, $p < .001$)。志向性の差について、さらに Newman-Keuls 法による対比較を行ったところ、HH

表2 親和動機, 達成不安, locus of control 尺度に対する各群の得点

	H H	H L	L H	L L
親和動機	36.49(4.71)	34.78(5.97)	34.07(4.22)	30.62(5.65)
積極的親和動機	24.35(3.26)	22.98(4.08)	22.82(2.76)	19.56(3.87)
消極的親和動機	14.81(2.71)	14.32(3.18)	13.80(2.69)	13.35(3.11)
達成不安	18.95(3.75)	21.83(4.21)	20.09(4.60)	20.62(2.90)
locus of control	9.50(2.14)	8.34(2.02)	8.74(2.17)	7.56(2.32)
成功場面	4.97(1.89)	4.17(1.61)	4.26(1.87)	3.68(1.71)
失敗場面	4.53(0.80)	4.17(1.29)	4.49(0.97)	3.88(1.49)

(カッコ内は標準偏差)

群は他の3群より親和動機が高く、LL群は他の3群より親和動機が低いことが認められた。HL群とLH群との間には差は見られなかった。また性差については、女子の方が男子より親和動機が高かった(男子全体の $M=31.58$, $SD=4.98$; 女子 $M=36.12$, $SD=4.85$)。

次に、積極的親和動機・消極的親和動機のそれぞれについて見てみると、積極的親和動機に関し

ては、分散分析の結果、志向性および性別の主効果に有意差が見られた(志向性: $F_{(3,148)}=13.39$, $p<.001$; 性別: $F_{(1,148)}=31.42$, $p<.001$)。対比較では、親和動機全体と同様、 $HH>HL\cdot LH>LL$ 群の順に親和動機が高かった。性差も同様に、女子の方が親和動機が高かった(男子 $M=20.94$, $SD=3.77$; 女子 $M=23.68$, $SD=3.47$)。これに対して消極的親和動機では、性差のみが有意であり(男子 $M=13.08$, $SD=2.63$; 女子 $M=14.98$, $SD=2.91$; $F_{(1,148)}=34.97$, $p<.001$)、志向性については有意差は認められなかった($F_{(3,148)}=1.62$, n.s.)。

また、親和動機と各志向性との相関係数を男女別に求めたものが、表3である。ここに見られるように、親和動機と社会志向性との相関はそれほど高いものではなく、特に消極的親和動機とはほとんど相関が見られなかった。課題志向性との関係も、ほぼ同程度のものであった。

(2) 志向性と達成不安

全項目について各項目と尺度得点との相関係数を求めたところ $r=.307\sim.460$ ($p<.001$)と中度の相関係数が得られたため(表4)、これらの項目はいちおう妥当なものと考え、全項目を採用した。可能な得点範囲は8~32点であり、またSpearman-Brown係数は.813であった。

4群の差に関する分散分析では、志向性条件に有意差が見いだされた($F_{(1,148)}=3.41$, $p<.05$)。対比較によれば、HL群の達成不安が最も高く、LH群・HH群との間に有意な差が見られた。またHH群の不安は最も低く、HL群・LL群との差が有意であった。性差および交互作用については有意差は認められなかった。

(3) 志向性と locus of control

この尺度は一対比較による回答であるため、尺度の検討にはGP分析(Good-Poor Analysis)が用いられた。このため、最初の14項目を合計した仮の得点にもとづき、高得点の者から順に約25%、低得点の者から順に約25%が選出され、この2群における各項目への回答が比較され

表3 両志向性と親和動機との相関

	社会志向性		課題志向性	
	男子	女子	男子	女子
親和動機	.379	.306	.328	.196
積極的親和動機	.414	.319	.395	.328
消極的親和動機	.176	.158	.111	-.029

表4 達成不安尺度の項目内容と項目-得点相関係数

項 目 内 容	相関係数
1. 後でやってみると簡単にできることも、人が見ている時にはうまくできない。	.382
2. 何かやっている時に、途中でうまくいかなくなると、後のできることもできなくなってしまう。	.460
3. やることが難しそうだと思うと、うまくできないのではないかと気になって、ますますできなくなる。	.437
4. やっていることが途中でうまくいかなかったとき、もうだめだと思ってしまうことが多い。	.408
5. なにかはじめる前に、きつとうまくいかないだろうという感じがする。	.403
6. 一つのことをやり終えても、本当にうまくできたかどうか心配で、次の事になかなかとりかかれない。	.391
7. 大事なことのある前の日は、それがうまくいくかどうか気になって落ち着かない。	.307
8. やっていることが自分にとって大事なことだと思えば思うほど、うまくできなくなってしまう。	.386

表5 locus of control 尺度の項目概要と GP 分析の結果

項 目 内 容	χ^2 値
1. テストでよい点をとった時 (+) よく勉強したから vs テストがやさしかったから	45.279 ***
2. 母親からほめられた時 (+) 母親の機嫌がよかったから vs 成績がよかったから	35.342 ***
3. 授業内容をよく覚えている時 (+) よく聞いていたから vs 先生がよく説明してくれたから	32.484 ***
4. 先生から「あなたの成績はよい」と言われた時 (+) 生徒をはげますためのことば vs 成績が本当によいから	53.510 ***
5. 学校で出された問題がなかなか解けなかった時 (-) よく勉強しなかったから vs 問題が難しすぎたから	27.581 ***
6. 母親から叱られた時 (-) 叱られることをしたから vs 母親の機嫌が悪かったから	23.834 ***
7. テストの点がよくなかった時 (-) テストが難しかったから vs よく勉強しなかったから	36.946 ***
8. 友だちがあなたのことを頭がよいと思っている時 (+) あなたを好きだから vs あなたがよい意見をいうから	10.920 ***
9. 宿題をやり終えることができなかった時 (-) 親が教えてくれないから vs 一生懸命やらなかったから	11.098 ***
10. ゲームの説明をして、友だちがよくわからなかった時 (-) 友だちの頭が悪いから vs 上手に説明できなかったから	12.482 ***
11. 出された問題が簡単にできた時 (+) やさしい問題だったから vs よく勉強しておいたから	66.289 ***
12. 授業で教わったことがとてもよくわかった時 (+) 授業をよく聞いた vs 先生の話がわかりやすかった	28.783 ***

(カッコ内の+は成功場面・-は失敗場面を表す；***p<.001)

た。その結果、2群の差が有意水準に達しなかった2項目が除外された。

表5には、12項目で再度GP分析を行った結果が、項目内容の概略とともに示されている。ここに見られるように、全項目とも0.1%水準で有意であったため、この12項目で最終的な尺度が構成された。なお得点範囲は0~12点であり、Spearman-Brown係数は.585であった。

なお、除外された項目はいずれも失敗場面に関するものであるため、最終的な尺度は、成功場面7項目・失敗場面5項目といくぶんアンバランスなものになっている。また成功場面・失敗場面に対する統制感はずしも一致しないと考えられるため、12項目の合計得点のほか、成功場面・失敗場面ごとの得点も算出された(得点範囲はそれぞれ0~7, 0~5)。これらについてもGP分析が行われ、 $\chi^2=17.80\sim 105.83$ ($df=1$)で、すべて0.1%水準の有意差が認められた。またSpearman-Brown係数は、それぞれ.475, .699であった。さらに、成功場面と失敗場面との相関係数を求めたところ、 $r=.039$ の値が得られた。

locus of control 得点の分散分析によれば、志向性条件が有意であり($F_{(3,146)}=5.18, p<.01$), HH群が他の群に比べて内的な統制感が強い傾向が見られた。またLH群も、LL群と比較して内的統制傾向が強かった。このほか、性差も有意であり、全般に女子の方が男子より内的統制感が強いことが認められた(男子 $M=8.05, SD=2.11$; 女子 $M=9.00, SD=1.93$; $F_{(1,146)}=13.00, p<.001$)。

また成功場面での locus of control 得点については、志向性条件のみに有意差が見られた($F_{(3,146)}=3.25, p<.05$)。これは、全体の locus of control 得点と同様 HH群が他の群に比べて内的統制傾向が強いことを示していた。これに対して失敗場面での locus of control 得点については、志向性条件に関して有意な傾向が見いだされたほか、性差も有意であった(志向性: $F_{(3,146)}=2.56, p<.10$; 性差: $F_{(1,146)}=20.13, p<.001$)。志向性に関しては、HH群・LH群がHL群・LL群に比べて内的統制感が強い傾向があることを示しており、また性差については、女子の方が内的統制感が強いことを示していた(男子 $M=3.94, SD=1.32$; 女子 $M=4.58, SD=0.74$)。

(4) 志向性と価値観

価値観に関する8項目の質問の概要と、そのうちa)を選択した者の各群ごとの比率が表6に示されている。価値観に関しては、男女によってかなり傾向が異なることが予測されるため、各項目ごとに、男女別の志向性条件の比較および男女間の比較が、 χ^2 検定によって行われた。さらに、志向性条件に有意差が見られた場合、対数一線形モデル(Everitt, 1977; 弓野, 1981によるBASICプログラムを利用した)によって、各群の特徴が分析された。なお、価値観の分析については、回答もれのある者は項目単位で分析から除外されている。

この結果、志向性条件の差が4項目に見られ、また性差も4項目に見られた。まず志向性条件の差について見ると、項目1については、男子においてHL群が他の群より「スポーツ」を重視していることが認められた($\chi^2_{(3)}=8.12, p<.05$)。項目2では、男女ともLL群・HL群が「両親の言いつけ」より「自分のしたいことをする」方を選ぶ傾向が見られたが、このうち女子のLL群についてのみ、有意な傾向が見いだされた($\chi^2_{(3)}=6.79, p<.10$)。また項目5では、男子のHH群が「自分の意見をはっきり言う」を重視し、逆にLL群は、「みんなの意見に賛成する」を重視していた($\chi^2_{(3)}=12.07, p<.01$)。項目7では、LL群が「教えられたとおりに作る」を選択する傾向にあり、このうち男子における比較が有意であった($\chi^2_{(3)}=10.14, p<.05$)。さらに項目8では、女子においてHL群が「勝ち負けをあまり気にしない」と回答する傾

表6 価値観項目の概要と各群のa選択率(%)

	男 子				女 子			
	HH	HL	LH	LL	HH	HL	LH	LL
1. a)勉強がよくできる	47.1	22.2	66.7	55.6	47.1	39.1	39.1	18.8
b)スポーツがじょうず								
2. a)両親の言いつけを守る	76.5	66.7	81.0	55.6	95.0	73.9	91.3	68.8
b)自分のしたいことをする								
3. a)ひとつのことがすごくできる	23.5	44.4	28.6	50.0	21.1	21.7	39.1	37.5
b)なんでもよくできる								
4. a)友だちに負けないように勉強	41.2	61.1	52.4	77.8	42.1	34.8	43.5	43.8
b)勉強のできない人に教える								
5. a)みんなの意見に賛成する	29.4	50.0	38.1	83.3	40.0	26.1	43.5	37.5
b)自分の意見をはっきり言う								
6. a)いつも先生にほめられる	17.6	23.5	42.9	33.3	21.1	13.0	30.4	12.5
b)みんなに人気がある								
7. a)工作は教えられた通りに作る	11.8	11.1	9.5	44.4	10.5	8.7	13.0	25.0
b)少しくふうして作ってみる								
8. a)ゲームを一生懸命がんばる	58.8	66.7	52.4	66.7	60.0	30.4	65.2	50.0
b)勝ち負けを気にしない								

表7 各群の知能偏差値および社会志向性・課題志向性得点

	H H	H L	L H	L L
知能偏差値	55.49 (9.21)	52.95 (8.63)	56.46 (11.72)	48.15 (9.71)
社会志向性	28.43 (2.54)	27.59 (3.75)	19.16 (3.42)	18.21 (3.55)
課題志向性	29.38 (2.42)	21.34 (3.08)	28.77 (3.14)	20.15 (3.04)

(カッコ内は標準偏差)

向が見られた ($\chi^2_{(3)}=6.41, p<.10$)。

また男女間の比較では、項目1, 4, 5, 6に有意差が認められ、男子の方がスポーツを重視し($\chi^2_{(1)}=2.81, p<.10$)、勉強において競争志向的であり($\chi^2_{(1)}=5.15, p<.05$)、周囲の意見に同調し($\chi^2_{(1)}=4.86, p<.05$)、教師からの賞賛を重視する($\chi^2_{(1)}=8.99, p<.01$)傾向が見いだされた。

(5) 志向性と知能偏差値

表7には、各群ごとの知能偏差値が示されている。志向性×性別の分散分析を行ったところ、LL群が他の3群と比較して低い値を示したほか、LH群とHL群との比較も有意であった。性差および交互作用については、有意差は得られなかった。

(6) 社会志向性と課題志向性

本研究での各群への分類基準は、一般に行われるような平均値または中央値前後で折半する方法ではなく、個人内での両志向性の差にもとづくものであった。また、HH群・LL群への分類基準は、両志向性の得点差が0.5SD以内という基準と平均値から1SD以上離れているという基準の2つがある。こうしたことから、たとえば同じように社会志向性の高い群であるHH

群と HL 群でも、志向性の高さは異なっていることも考えられよう。そこで最後に、各群における両志向性の差について、分析が行われた。

分散分析の結果、社会志向性・課題志向性とも志向性条件に有意差が認められた（社会志向性： $F_{(3,148)}=99.62$, $p<.001$ ；課題志向性： $F_{(3,148)}=106.96$, $p<.001$ ）。さらに Newman-Keuls 法による対比較によれば、社会志向性では $HH \cdot HL > LH \cdot LL$ の関係が、課題志向性では $HH \cdot LH > HL \cdot LL$ の関係がそれぞれ確認され、各志向性の H 群・L 群の中の 2 群の間には、差は認められなかった（表 7）。

また、社会志向性と課題志向性との相関係数を求めてみると、全体で $r=.324$ 、男子で $r=.418$ 、女子で $r=.219$ の値であった。

考 察

冒頭に述べたように、本研究における社会志向性は、消極的な意味での親和動機と異なり、より積極的に達成行動と関連する動機特性として設定されたものである。本研究の結果もこれと対応したものであり、社会志向性は、消極的動機とほとんど相関が見られず、積極的親和動機とより強い相関を示していた。課題志向性との相関も、積極的親和動機と同程度の高さを示し、一方消極的親和動機は課題志向性とはほとんど相関が見られなかった。これらのことから、社会志向性の概念が、積極的側面と消極的側面とが分離されていない従来の親和動機に比較して、より積極的な動機であるということが確かめられたと言えるであろう。また、社会志向性・課題志向性の相対的高低にもとづく 4 群間の比較でも、社会志向性の結果と親和動機の結果とは様相を異にしており、このことも、親和動機と社会志向性との違いを示すものと考えられる。

ところで、親和動機は、従前から言われてきているように女性に優位な動機であると考えられる。本研究でも、積極的親和動機・消極的親和動機ともに性差が見られ、女子の方が全般に高い親和動機を示していた。これに対して社会志向性では、性差は認められなかった ($t=.482$, $df=236$)。つまり社会志向性は、親和動機のように女子に特有の動機ではないと考えられるであろう。この社会志向性の特徴は、従来の達成動機・親和動機の枠組みの中で行われてきた研究で、しばしば男女による結果の違いが報告されてきたのが、課題志向性・社会志向性という枠組みではかなり回避できる可能性があることを示唆するのではないだろうか。実際、本研究で行われた分析のうち、価値観の分析を除けば、志向性条件と性別との間に交互作用は認められなかったのである。

しかし、これと関連して、課題志向性と社会志向性との関連を見ると、男子では比較的高い値を示しているが、女子では、積極的親和動機と課題志向性との相関の方が .328 と高く、このことは、女子における親和動機の影響が依然として無視できないことを示すものであるかも知れない。ただしこれは、課題志向性と社会志向性との間に女子の方に一貫して高い相関を見いだした中山 (1986) の研究とは矛盾するものであり、この相関の値そのものに、まだ検討の余地が含まれている。

いずれにしても、社会志向性の優位性は、従来の全般的な親和動機に対して認められたものであり、積極的・消極的側面を区別した場合の積極的親和動機については、相関分析でも社会志向性とおおむね同様な傾向を示している。社会志向性と積極的親和動機とがどのように異なる

り、それぞれどのような影響性を持っているかは、今後さらに検討していく必要がある。

次に、達成不安と locus of control に関しては、主に HL 群の特徴を中心とした仮説が設定されていた。すなわち、HL 群では「他者からの評価」が重要な意味を持っており、特に彼らは、否定的評価への不安を持っているということが仮定されることから、HL 群は locus of control に関して比較的外的な統制傾向を示し、また達成不安は強いであろうと予測された。

結果は、おおむねこの仮説を支持するものであった。まず達成不安については、HL 群が最も不安が高かった。特に、社会志向性・課題志向性ともに低い LL 群と比較しても有意に高い不安を示したことは、注目すべきであろう。また locus of control に関しては、HH 群が内的統制感を強く示しているのに対して、HL 群は、比較的外的統制傾向が強く見られた。HH 群以外との比較では必ずしも明確な結果は得られず、この結果は限定して考えなければならないが、達成不安・locus of control の結果を総合すると、HL 群における他者からの評価への懸念がある程度確認されたと言えよう。

ただし、冒頭に述べたように、本研究で用いられた locus of control 尺度は、内的・外的統制傾向を測定するものであり、HL 群の大きな特徴であると推測される意味ある他者への依存傾向は、本研究ではとらえることができなかった。HL 群や他の群において教師や両親といった意味ある他者がどのように認知され、意味づけられているかについては、今後の検討を待つよりない。

さて、価値観の分析では、男女による回答傾向の違いが大きく、結果も非常に複雑なものになった。この点については、本研究でのデータ数の問題もあり、さらにデータ数を増やして、安定した結果を得る必要があるが、概略的には、次のような傾向が示唆されるのではないだろうか。すなわち、HL 群は勉強よりスポーツを好み、しかも勝負にあまりこだわらない。これは、この群における評価懸念の存在を裏づけているように思われる。また LL 群は、両親の言いつけよりは自分のしたい事を優先する一方で、多数の意見に同調したり、指示された内容だけを忠実に行うといった消極性も見られる。もちろんこれは、男女間の傾向の違いを無視した恣意的なまとめ方であり、現在のところひとつの可能性としての指摘にとどまるが、検討を続ける価値はありそうに思われる。

以上、目的に述べた仮説の多くは、ある程度の限定条件をつけて、おおむね支持されたと言えるであろう。今後は、この結果の限定条件をさらに明確にし、またその適用範囲を広げるよう、より細かい点についての追究が必要であると考えられる。

注

1) 後述するように、Nakamura & Finck の作成した尺度において、社会志向群は HHH 群に対応すると述べられており、社会志向群という命名にもかかわらず、実際には社会志向性・課題志向性の双方とも高い群と考えられる。

2) 尺度得点の中には当該項目への反応も含まれているため、不当に高い相関係数を得る可能性がある。そこでここでは、尺度得点から当該項目への反応を引いた得点と当該項目との相関係数が求められた。

引用文献

- Boyatzis, R. E. 1973 Affiliation motivation. In D. C. McClelland & R. S. Steel (Eds.) *Human motivation: A book of reading*. General Learning Press, pp. 252-276.
- Crandall, V. C., Katkovsky, W., & Crandall, V. J. 1965 Children's belief in their own control of reinforcements in intellectual-academic achievement situation. *Child Development*, **36**, 91-109.
- Everitt, B. S. 1977 *The analysis of contingency tables*. Chapman and Hall.
- 石田梅男 1981 内発的動機づけ 遠藤辰雄(編)アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版, pp. 149-161.
- Murray, R. A. 1938 *Exploration in personality*. Oxford University Press.
- Nakamura, C. Y., & Finck, D. N. 1980 Relative effectiveness of socially oriented and task-oriented children and predictability of their behaviors. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, No. 185 (Vol. 45, Nos. 3-4).
- 中山勸次郎 1983 児童における社会志向性と課題志向性について 教育心理学研究, **31**, 120-128.
- 中山勸次郎 1984 児童の社会志向性・課題志向性と共同課題解決事態における行動について 教育心理学研究, **32**, 276-285.
- 中山勸次郎 1986 児童の課題志向性・社会志向性の測定 —測定尺度および分類方法の再検討— 上越教育大学研究紀要(第1分冊) **5**, 1-16.
- 奥野茂夫 1983 達成動機 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩 —1983年版— 金子書房
- 千石保・飯長喜一郎 1979 日本の小学生 —国際比較でみる— 日本放送出版協会
- 下山剛・曾我部和広 1977 児童の達成・親和動機づけの測定に関する研究 東京学芸大学紀要 第1部門(教育科学), **28**, 38-46.
- Sid, A. K. W. & Lindgren, H. C. 1982 Achievement and affiliation motivation and their correlates. *Educational and Psychological Measurement*, **42**, 1213-1218.
- 下山剛・藤原喜悦 1968 児童の学習動機に関する研究(1) —学習動機質問紙作成の試み— 東京学芸大学紀要 第1部門(教育科学), **19**, 101-109.
- 弓野憲一 1981 対数-線形モデルによる質的データの解析とそのためのBASICプログラム 静岡大学教育学部研究報告(自然科学編), **32**, 189-215.

Socially and Task-Oriented Children and Their Perceived Motivational Traits

Kanjiro NAKAYAMA

ABSTRACT

In this study, it was aimed to analyze how socially and task-oriented children perceive their motivational traits.

A self-report measure of social and task-orientation was conducted to 243 boys and girls in sixth grade, and they were classified into four groups according to their relative dominance of orientations. At the same time they completed the measures of affiliation motive, achievement anxiety, locus of control, and sense of value. Responses of four groups were analyzed.

Main results were as follows.

- (1) Social orientation only correlated to positive affiliation motive, and was proved to be some positive social motivation.
- (2) HL group (whose socially orientation are dominant) showed higher achievement anxiety and external locus of control.
- (3) Boy and girls valued very differently, but some characteristics were found. That is, responses of HL group showed their apprehension for evaluation, and LL group (whom neither orientation are above average) showed passive attitude toward school.